

第5講 国民史の幻想

10分間レポート：何故、歴史は国民史として語られるのか？

すべての歴史は民族史という枠組みで作られる

世界史は民族史の集合体ではない

地球は現代国家の国境線によって区切られる

フランス史・ドイツ史・イギリス史・ロシア史・イタリア史・・・

民族の呪縛

太古よりの血縁集団

運命共同体

文化と言語の共有

近代歴史学は民族を前提とする

民族の虚構

nationとnatio

natioは特定の地方への帰属性を示す

県人会

nationは国民への統合性を象徴する

民族

フランス革命による民族の創造

言語・歴史・制度・慣習・文化・価値観の統一

教育と強制による統一

フランス語は北部のオイル語系のパリを中心とするイル=ド=フランス地方の言葉（革命当時では2400万人の国民中300万人くらいが正確なフランス語を話していたという）

南フランスではオック語（プロヴァンス語など）が話されていた
フランス東部ではドイツ語の中に分類されるアルザス語

ブルターニュでは別系統の言葉が話されていた

19世紀後半でもまだフランス人の半分がフランス語を話さなかった

民族史の矛盾

民族の観念を持たない時代や世界を19世紀の民族観で縛ってしまう

中世ノルマンディー公国はフランス史？それともイギリス史？

1066年以降はイングランド王でもある

ウィリアムと書くのが正確なのか、ギョームと書くのが正確なのか？

リチャードが良いのか、リシャールが良いのか？

アンジュー帝国はフランス史？

近代トリエステ史はイタリア史？それともオーストリア史？

近代ベオグラード史はセルビア史？トルコ史？それともオーストリア史？

古代マッサリア史はギリシア史？それともフランス史？

人々が国境を超えて活躍していた時代

19世紀以前

プリンツ=オイゲン=フォン=サヴォア (1663-1736年)

北イタリアのサヴォア家の一族

フランスで生まれる

父はサヴォア家の傍系に属するフランス貴族のソワソン公ウジェーヌ=モーリス

母はマザランの姪のオランピア=マンチーニ

毒薬事件で一家はベルギーに亡命

父の死後、フランスでの軍務を望むも拒まれる

神聖ローマ皇帝レオポルト1世の軍に迎えられる

北イタリアでフランス軍相手に功績を立て、抜擢される

トルコ戦を指揮し、ベオグラードをトルコから奪取する

スペイン継承戦争ではイギリスやオランダの協力を得てルイ14世のフランス軍を苦しめる

晩年は軍の高官として大きな影響力を有する

現在でもドイツやオーストリアでは敬愛され、銅像が立てられ、「プリンツ=オイゲンの歌」や「プリンツ=オイゲン行進曲」が演奏される

ボンヌバル (1675-1747年)

フランス出身

フランス軍の軍人から皇帝軍の将軍として活躍

ルイ14世のフランス軍と戦ったり、トルコ軍と戦って大きな功績を立てる

後にトルコに亡命しイスラムに改宗

軍事顧問としてトルコの軍事改革を行う

民族はこれらの人々の行動規範ではなく価値基準でもない
これらの人々を出生地や血統で民族という枠組みで構成される国民
史の中に押し込むことはできない